

ここで思考とは何かという問題に展開しましょう。私にとって思考することの本質とは、とある現象と現象の間にある偶然の一致や関係性を見いだすということ——つまり「発見」をするということです。私には、※₃方法論や抽象的な問いよりも、このことのほうが重要なのです。私にとって「発見」とは、変数間の一致を見いだすことを意味します。とはいえ実際のところ、※₄社会科学の研究者の大半はたいした発見をしません。理系の学問と異なり、すべてを科学的に確認するわけではありませんから。その意味では私の態度はどちらかというと、理系の科学者に似ているのかもしれないですね。

いずれにせよ、どんな領域であっても科学の出発点となるのは非常に膨大かつ複雑なデータです。それらのデータはたいして入手困難でし、データの収集や検討というのは、とにかく大変な作業なのです。ところがそんな作業をしていると、ある日突然、体系だったアイディアを思いつくのです。しかも、この思いつきというのは、往々にしてそれ自体は非常にシンプルなものなのです。一般的に、科学におけるすばらしいひらめき、アイディアというのは、本質的に単純なものが多いのです。アイディアを思いついた後に気づくのは、そのアイディアはだれにとっても明白で、理解可能なものだということです。

ちなみに、アイディア、仮説、直感の違いをうまく定義するのは難しいので、私はそれらをまとめて「ブレーク」と呼んでいます。何かが思い浮かぶとき、それは※₅テニスでいうブレークの瞬間なのです。興味深いことを見つけた、何かがある、という感覚です。あるいは収集したデータなどのなかに特異な点を見つけて、その意味を見いだすことができたりしたときのことを指します。

(エマニエル・トッド 大野舞(訳)『エマニエル・トッドの思考地図』二〇二〇年 筑摩書房)

※₃ 方法論：研究方法そのものについての学問的論議。

※₄ 社会科学：社会現象を研究対象とする科学の総称。

※₅ テニスでいうブレーク：テニスではサーブ側が有利であるが、受ける側が相手のサーブに勝つこと。